

鴨川市史にみる海のエピソード①

鴨川市史の資料から海に関するエピソードを拾ってみました。
わくわくする海の話がもっとありそうです。みなさま是非教えてください。

(清野聡子)

避暑と海水浴

要点	記述の要約	コメント
海水浴の発展	1925(大正14)年に太海方面から鉄道が開通。海水浴客や避暑客の増加が見込まれた。	鉄道網の整備と海洋観光の振興が同調
町の努力	鴨川町では1924(大正13)年から、前原・川口・大浦の各青年団に補助。テントなどの海水浴場の設備を整えた。	町ぐるみの対応
避暑客の増加	1925(大正14)年5月には、鉄道省主催の週末観光団180人が太海駅で下車。鴨川町に宿泊。その際、助役が宿を回り、旅行団に待遇の満足度合いを聞いてまわった。	顧客満足の重視
避暑客の増加	1929(昭和4)年、勝浦・安房鴨川間が開通。避暑客の増加。 1925-30年で約7割の増加。	夏季の外房線は海水浴、避暑客列車に。
他の地との比較	保田・岩井・館山・大原・御宿・勝浦に較べて、千葉や東京から地理的に離れている。	観光地として時間距離のハンディ
宿泊料	1934(昭和9)年には、避暑客用の臨時列車「黒潮」が両国・安房鴨川間を一往復。	旅客輸送強化で対応
接客の訓練	1928(昭和3)年の鴨川町の吉田屋・相模屋の宿泊料は2-3 旅館では避暑の季節前に、接客係のサービス講習会を開催。1932(昭和7)年には、鴨川・天津・小湊の三町の旅館の接客係が、鴨川の吾妻屋旅館で2日間の講習会を受講。	顧客満足の重視
臨海図書館の設置	1932(昭和7)年には、県立図書館が夏季1ヶ月、鴨川海岸に臨時図書館を設置。海水浴客に、海に入りながら読書趣味を育成させる目的。	読書は当時の高級な娯楽のひとつでもあった。夏目漱石の小説などでも海水浴場での読書の記述があるので流行していたのだろう。現在の海水浴をしながら楽しむ文化は、音楽か？
	利用時間は正午から5時まで。雑誌、画報、児童読み物。好評を博す。受付は地元の小学校高等科と補習科の生徒。 臨海図書館は千葉市と富浦村の海岸にも設置された。	房総の海岸文化

※出典:『鴨川市史 読本編 鴨川のあゆみ』鴨川市,平成10年